はしがき

広島・山口・島根・鳥取・岡山の五県は、現在の一般的な地域区分では「中国」に分類されている。その語源は、律令体制下における都からの距離に応じた区分（「近国」と「遠国」の中間）にあると考えられるが、その範囲が右記の五県の地域に定着していくのは南北朝期である。広島県は東を岡山県、西を山口県に接し、中国地域の中でも東西の中間に位置する。また、広島県は瀬戸内海に面しており、日本海には面していない。ところが、広島県の分水嶺は岡山県や山口県との県境付近では島根県との県境にほぼ重なっているが、中央部では県内に大きく入り込んでいる。したがって、広島県北部は流域でみると、日本海につながる地域が少なくない。さらに、廃藩置県以前には、広島県に相当する地域の西部は安芸国、東部は備後国で、備後国は古代吉備国が分かれて成立したものである。このため、中世になっても備後国は東方面とのつながりも強かった。

このような地理特性や国の成り立ちなどを反映して、安芸・備後国は室町期においても、中央政権の影響力の強い地域と中央政権から自立的な地域大名の支配する地域との「境目」としての性格を帯びる地域だった。一方、南北朝合一時の守護職には幕府中枢にあった細川氏が補任されていたが、応永年間以降、山名氏が両国の守護に補任されている。もっとも、安芸・備後国は山名氏分国の周縁部に位置するため、その支配は不安定だった。東部は都にも相対的に近く、備後国に隣接する備中国の守護職に細川氏が補任されていたため、細川氏の影響力も強かったが、西部は安芸国に隣接する周防国守護大内氏が徐々に影響力を広げつつあった。

そのような状況下で勃発した応仁・文明の乱の後、山名氏による安芸・備後国支配は次第に弱体化していく一方で、西からの大内氏の進出は促進されていった。また、右記の分水嶺が示すように日本海側とのつながりも強かっ

たため、出雲国を統一した尼子氏が南下を進めた。戦国初期には細川氏の影響力も色濃く残っていた。

そのため、安芸・備後国人衆は対立する勢力の狭間で、国外勢力に対抗するために一揆を結び、あるいは対抗を諦め国外勢力に従属するなど、家の存続のために苦闘した。最終的に毛利元就を盟主として国外勢力を駆逐。元就は中国地域の過半を制圧して、戦国大名となる。元就の後継者輝元は、織田信長の天下一統戦争に対抗したが、信長横死後、羽柴秀吉と講和して、豊臣政権下において中国地域八カ国を領有する大大名となったが、秀吉死没後の関ヶ原合戦において徳川家康に敵対して、戦後は周防・長門二国に減封され、広島県を去る。安芸・備後二国には関ヶ原合戦において東軍として活躍した福島正則が封じられ、安芸・備後国の戦国期は終焉を迎えた。

本書では、こうした応仁・文明の乱から関ヶ原合戦に至る約一三〇年間の政治史を中心に、宗教・文化、経済流通・民衆生活、城郭など、多角的な面から戦国時代の広島県の実像に迫っていく。とりわけ、従来の通史においては十分な考察が行われていなかった守護山名氏や、「国衆」とも呼ばれる有力な国人層に注目して、その動向を追っていきたい。

なお、広島県の県史編纂事業（中世分）は、一九七三～八〇年に刊行された資料編、一九八四年に刊行された通史編が直近のものである。また、当時の戦国期に関する研究を総括することを目的に刊行された『戦国大名論集』のうち、『毛利氏の研究』と『中国大名の研究』も一九八四年の刊行で、いずれも約四〇年が経過している。この間の新史料の発見、研究の進展によって、政治史のほか、宗教・文化、経済流通・民衆生活、城郭いずれの分野においても、『広島県史』や『戦国大名論集』に記述された内容には見直しを迫られている箇所が少なくない。

本書の第Ⅰ部は、『広島県史』通史編の記述を踏まえたうえで、近年の先行研究の成果に学びつつ、現時点における私見も加えて、広島県における戦国期の政治動向を追っていったものである。そして第Ⅱ部は、宗教・文化、経済流通・民衆生活、城郭といった政治史以外の分野のうち、近年に研究が深化している分野を取り上げて詳述したものである。

右記のような方針に基づき執筆したため、巻末に記載した参考文献は、主に一九九〇年以降に発表されたものに

限定している。それ以前の研究については『広島県史』や『戦国大名論集』をご参照いただきたい。また、『広島県史』以降に編纂された市町村史の記述も本書においては参照したが、直接引用した記述や史料を除き、参照文献としての記載は割愛した。さらに、参考文献や引用史料については、再録されたものや複数の刊行物に掲載されているものもあるが、読者の便宜を考慮し、比較的直接手に取りやすいものを記載している。紙幅の関係から本書においては十分に言及できなかった内容も少なくない。参考文献をぜひご一読いただきたい。